



— 巻 頭 言 —

核医学技術の世界的標準化に向けて，日本発信

核医学技術セミナー，国際交流担当理事 長 岡 宏 明
(岩手医科大学附属病院中央放射線部)

海外の学会に参加すると日本の核医学技師の研究発表は特に優れていることを実感します。また，世界の核医学の実情と比較しても，日本の核医学技術は世界をリードしていると自負しております。PET保有台数も日本は世界のトップクラスで国内にはサイクロトロンが溢れています。近い将来，使用済みサイクロトロン廃棄処理問題が発生すると予想されます。PET 4核種については廃棄方法が規制緩和され，他の核種が混在せず七日間管理保管すれば非放射性廃棄物として処分できる緩和措置がとられております。家庭ゴミでは可燃・不燃などの分別廃棄が常識となっているように，医療用の短半減期放射性廃棄物も核種（半減期）で分別し減衰保管（DIS: decay in storage）することにより，処理施設の負担を軽くし浅中埋設処分総量を少なくすることが可能となります。

PET装置の動向としては，今後導入される装置はPET/CTが主流となり，フュージョンや被曝軽減を検討するうえで，CTやMRIに関する専門的な技術知識も必要とされます。画像は融合画像，装置も複合装置となった今，それを操作する放射線技師にもマルチフュージョンが要求されています。放射線技術分野が専門的に細分化されモダリティ毎に進歩発展してきましたが，これからはそれらを総合的に融合する能力が要求される時代です。

本学会の発足当時がインビボ・インビトロの二本柱で活動していたように，今後しばらくはSPECTとPETが核医学の主流になると予想されます。本学会ではいち早く「FDG-PET検査における撮像技術に関するガイドライン」を策定しました。現在PET施設には「所定の研修」を受講されたPET認定放射線技師が従事しておりますが核医学検査未経験者も多いようです。今後はそれらのPET担当技術者の本学会への入会促進が必須と考えます。平成18年より核医学専門技師認定試験が行われ，現在302名の専門技師が誕生しました。試験内容は核医学全般に渡りかなりの難関ですが，設問の難しさは将来の核医学技師に要求される課題を意味していると思われます。

- PETを含む核医学施設には必ず核医学専門技師が常勤し従事しなければならない。
- 核医学専門技師が常勤している核医学施設では特別加算点数を請求できる。
- 放射性廃棄物の減衰保管管理は核医学専門技師が行う。等の改訂がされるためのために（されることを期待して）我々は準備しておかなければなりません。そして全国の核医学施設には必ず核医学専門技師が配属され，地域の核医学技術へ貢献できるよう学会は優れた核医学技術者を育成していかなければなりません。

現在殆どの技師学校が4年制の大学となり，大学院修了生も多く活躍しております。一昔前の放射線技師は医療技術技能集団，早い話は職人でした。放射線医師が技師を管理し，放射線技師は技術職人でありとされてきました，が時代の要求は違います。放射線管理はもちろん，病理病態，読影診断，治療計画，医薬品調整管理，環境廃棄物管理，病院経営，心筋から脳血流，PETからスキャナーまで，核医学に関する全てを理解したスーパーマルチなテクノロジーロジストが要求されております。

米国のSNMとSNMTの関係のように，2008年から本学会学術大会は日本核医学会との合同開催となり，同一の目標に向かって歩んでいきます。まさしく医師と技師および核医学にかかわる全ての職種の融合と協調であり，同じ目的を持つ同志のフュージョンが発生します。また本学会の法人化作業も着々と進められており，今後は単なる任意団体ではなく社会に貢献することを認められた団体として生まれ変わります。

患者様が全国どここの核医学施設で検査を行っても，同じ診断が可能な画像情報を提供しなければなりません。現在各学会WGでは画像の標準化が進められております。この標準化という意味は各施設の画像を標準レベルにするのではなく，低レベル画像の向上化が目的です。この活動で機器の出力画像は向上しますが，最終的には検査に携わる核医学技師および読影する核医学医師の標準化（向上化）が必要と考えます。さらには核医学に対する熱意やモチベーションの向上も必要です。

いままで核医学技術セミナー，PETセミナー，標準化ファントムスタディなどを地方で開催し，核医学技術における地域格差の改善に努めてまいりました。今後は，日本はもとより世界の核医学技術の標準化（向上化）に技術貢献し，日本の核医学技術が世界の指標となり世界から信頼され必要とされる学会となるよう更なる発展に努める所存であります。会員の皆様のご指導とご協力のほど，よろしくお願い申し上げます。